

The Presence of Human Being (3)

—Philosophical Meditation—

Seishi ISHII

ABSTRACT: This is the third part of our philosophical meditation on the meaning of human being in the present situation of the world.

In the preceding chapters we examined the essential problems of man in the present age. The arrival of the age of nihilism had been already prophesied by Friedrich Nietzsche, especially in the thought of “the last man” in his book “Zarathustra”. Led by his fundamental thought we here try to grasp the nihilism which has become real in the modern world through the turn of all beings to quantity. All beings, the living as well as the non-living, appear to us today as quantity, that is, the matter which will be measured and calculated. Likewise the man himself presents himself today as homo, nothing but one species of animals which should be determined, researched and controled biologically, psychologically and sociologically. The standpoint of human sciences itself involves a moment of dehumanization. The way of understanding of man as being determined biologically (by blood and soil), psychologically (by id) and sociologically (by social institution) is just actual form of nihilism in the modern world.

考、つまり現実そのものの道理に従うのではなく、「結果」から考える思考に、ニヒリズムの核心事を見る。そこでは、一々の人間の内面性、孤独、その苦悩、尊厳、無限な責任意識等が視界の外に置かれるのである。

彼は次のように語っている。

「特に生理学主義に関して言えば、それが認めるものは、『生命の機械論』の如き意味で、唯機械的な機構と化学的な機構のみである。而して、生命のこの機械論的な見解が活力説の如きものによって克服される場合でも、それは生物の中に、そしてまた『ヒト』の存在の中にも、条件反射乃至無条件反射によって支配されている装置、あるいは自動機械のみを見るのである。そうすると、人間学は、当然、動物学の一分科に転落して、本来の人間の本質学は、或る直立歩行する哺乳動物の学となるであろう」と。

今日の分子生物学は生物を物質のメカニズムとして説明するのであり、人間もまた、そのようなメカニズム、「自動機械 Automaton」の非常に精度を高めたものと見る。

同様に、「心理学主義」もまた、人間を一つの「機械的装置 Apparat」の形において捉える、と行うことができる。その場合には、心は「心的機構 psychische Mechanismen」となる。だが、「心的装置の自動のみが見られるのである限り、精神的実存の自律は無視される」のである。その場合には、心的生命は自動的に働く衝動の力の作用の如きものとなり、人間もまた一つの衝動の束の如きものとなるであろう。そして、「社会学主義」は、人間存在を社会的メカニズムとして考

石井誠士：人間の現在

えるのであり、その場合、個々人は言うまでもなく、社会という大きな「自動機械」を構成する部分品、ボルトやナットや歯車でしかなくなるのである。機械の部分品は機械のシステムを離れては存在価値を持たない。しかも、システムとシステムとの関係は権力と権力との関係であるから、機械の部分品としての個々人は否応なしに集団の力の中に自己を没することになる。学校とは、かかる部分品としての人間の製造工場に他ならない。機械にうまく適合しなかったり、老朽化したりした部分品は別の新製品と交換されねばならない。集団のメカニズムが個々人の存立を意義づけ、可能にするのであって、逆ではない。このような「集団主義 Kollektivismus」集団決定論は、今日、我々の身近なところに有るあらゆる団体において認められるものである。あるいは、個人を個人として見ず、何らかの集団の成員としてのみ見ようとする性向のところに、それは必ず有る、と言わねばならない。

フランクルの力説しているように、人間の現実を何らかの必然性に、「結果」に還元して、そこから人間学を構築するところに、現代のニヒリズムの本質が有る、と言い得る。「これら三つの観点のいずれにおいても人間の存在は意味を持たなくなるに違いない。そこでは、人間は或いは内部の針金で、或いは外部の針金でピクピク動かされる操り人形となって現われるのである」。

註

- (1) Frankl, Viktor E.: Homo Patiens; Deuticke, S. 11f.
- (2) ibid., S. 2.
- (3) ibid., S. 2.
- (4) ibid., S. 3.

は、関係の現実が有する内面化の無限性の局面を切り落とす。

あるいは、青少年の性教育において、純潔とか婚前の性交渉が問題になり、しばしばアンケートによる統計の結果に基づいて、青少年の生活の実態と課題が論じられたりする。この場合にも、統計による数に現われた平均的意識が人間を決定するものとみなされている。更にそれに基づいて「新しいモラル」が考えられることすら有る。性を動物の性の延長線上に考える限り、性における愛の覚醒と根源的な自己実現という個々人の本来の課題は完全に無視されることになる。

二十世紀の偉大なサイコセラピストであり、『一人の心理学者が強制収容所を体験した』（邦訳『夜と霧』）の書の著者として有名なフランク（Frank, E. V.）は、こういう現代の人間の存在の仕方——学問的研究の方法としても、また日常的な在り方としても——本質的な人間性否定の契機を認めて、的確に次のように語っている。

「現実がその都度いかなる残部に還元されるかに応じて、乃至は現実がその都度いかなる残部から演繹されるかに応じて、主としてニヒリズムの三つの変種もしくは活動形式が区別される。すなわち、還元が生理的現実になされるならば、生理学主義の形でニヒリズムが現われ、心的現実還元されると心理学主義の装いを取って、また社会学的現実還元されると社会学主義の装いを取って現われる。

ニヒリズムはそれらのいずれかである。いずれの場合にも、現実はいくち縮小されて、生理学的であれ、心理学的であれ、社会学的であれ、事実の単なる効果に、産物に、結果になってしまう。しかし、単なる効果が見られるところには、志向は見るできない。そして、志向

を見ることができないところには、意味も見出せない。存在は意味を奪われる」と。

生理学や心理学や社会学の見方が普遍化され、絶対化されるとき、フランクの言う如く、「生理学主義 Physiologismus」や「心理学主義 Psychologismus」や「社会学主義 Soziologismus」が生じて、具体的現実的な人間の存在の意味そのものが見られなくなる。つまり、生理学的や心理学的や社会学的な必然性、衝動のメカニズムの視点が全てであり、自明の前提とされるとき、まさしくそうした衝動のメカニズムにおいてこれを無限に越えるものとしての人間の存在そのもの、「私と汝」の人格的關係の現実、そこから初めて我々の我々自身への問いも生ずるところの自己の存在そのものは視界の外に置かれることになる。そのとき、人間は、物質から生物への物質の発展史上の一変種としてのみ、「ヒト」としてのみ見られることになる。

問題は、人間を「ヒト」として見ることに、人間を諸科学の対象とすることに有るのではない。むしろ、そのように人間を見ることを唯一とし、普遍化し絶対化することにより、現実の具体的な人間の事実性が抽象化される点に有るのである。人間の諸科学により人間が対象的に認識される。つまり、心や欲求衝動のメカニズムが明るみにもたられる。けれども、それによって、自己自身を内から無限に越えて自己実現していく人間固有の存在の意味は見えなくなる。一々の個人において覚醒する、運命を不断に突破し荷いいく生命の事実が見失われる。フランクは、具体的な人間を抽象して、それを「効果 Effect」、「産物 Produkt」、「結果 Resultat」等の相において見る現代人の思

造上正確な対応の有ることが認められるし、またその故に、それらの動物が医学のための実験動物として使われるのである。人間を自然の一部分とする自然主義的な見方と人間を自然の主人とし、他の生物を支配し、犠牲にして己れの生物的な存在性を強化しようとする人間主義的な見方とは一つに結びついている。人間は自らを自然の一部分とする見方を貫くことによって、自らの存在を維持し高揚しようとする。つまり、近代において、人間が自然に向って企投した「一」機械論的自然や生物学的自然は、実は、人間がそれによって自然の中の存在者としての自らの存在を立て、進展させようとする方法の意味を持っているのである。

だが、その場合に重大なのは、そのようにして自然の中で生存を維持し高揚していこうとする人間が、自らの存在そのものをも自らの企図した機械論的自然、生物学的自然の内部に、その一つの極限的な特殊な形態として、つまり「ヒト」として、更に言えば、「量」として見るようにならざるを得ない、という点にある。既に「物」にも「物量」の在り方を超出した在り方が有るはずであるが、人間の場合、どこまでも動物の一種、類人猿の一種でありながら、そのことに即してそれを越える面を有する。人間には「ヒト」として、一つの閉じられた体系としてのみは考えられないもの、むしろそれを破るものがその本質に有る、と言える。だが、現代の人間は人間の中核に厳然として有るそういう超理性的なもの、固定して体系思想的に把握し得ないものをも自らの企投した体系の枠組の中に把えこもうとする。

人間のそういう、その成立のもとの実実を離れて自らの生を抽象的

に構成する在り方は、近代及び現代の人間学に共通している、と言うことができる。そして、かかる人間学に基づいて、現代の世界の人間の在り方、その教育や行動も成立しているのである。

このことを、次に例を挙げて具体的に考えることにしよう。

例えば、現代の心理学や社会学の研究方法として、アンケートによる資料の抽出が有る。研究者が特定の結果を予め想定して、その結果を証明するような答えを引き出す問いを被験者に向って提出するこの方法において、人間は明らかに、何らかの視点の下にこしらえられたいくつかの典型に従って分類されるグループの単位として見られる。このような研究において常に問題になるのは、人間の心や社会を統計的数値によって客観化して把握しようとする、こと、そして、そのようにして客観的とされた事実が人々の生活を規定し始める、ということである。

或る大学で学生達に調査を行って、彼等が過去半年間に読んで感銘を受けた五冊の書物のタイトルを挙げさせたことがある。調査者はそれによって現代における青年達の一般的な関心の傾向を把握しようとしたのである。この調査のような場合には、書物のタイトルの示す諸傾向に占める学生のパーセンテージが学生の人生態度を知る手がかりとされる。

だが、一冊の書物に接する仕方一つを考えてみても、それは人によって極めて多様であって、そのことを無視して、一冊の書物に唯関わったという事実のみによって人々の生き方を平均化して把えようとするのは、人間の活きた現実に対し初めから目を塞ぐものである。それ

駐車場も作られた。谷には、あちこちに砂防ダムがこしらえられ、曾つて修行者達が往来した小道はコンクリートのドライブウェーに変わった。山頂から伸びた尾根にはスカイラインが敷かれ、その起点となる峠の附近には宅地が造成されて、ニュータウンが現出した。山頂に達するには、ドライブウェーの他、ケーブルカーやロープウェーによるルートも開かれている。

昔と今との違いは根本的である。山はもはや山ではなく、一つの観光資源に過ぎなくなった。峠も峠ではなくなって、土地資源に、それから、谷は交通資源になった。

同質同幅のコンクリートの帯であるドライブウェーを車でつづ走る人は、誰も、昔そこに有った溪谷の滝や深淵や水車小屋やその傍の細い山道などの景観を想い浮べることはない。彼にとって、目的地までに要する時間の量や自動車の運転のスピードと軽快度と安全度が重要関心事である。不意に現われて来るもの、彼の計画を破って入って来る「突如的なもの」、計量できないものは彼が常に切り捨て、考慮外に置く悪しきものである。彼は今日町で或る量の仕事をしなければならぬ。それには、何時何分にそこに到着していなければならない。

そのために、今彼はそこを走っている……。『道路』は量であり、目的地に到る手段であつて、曾つて『道』がそうであつたように、それ自体が独立して無限な深さと威厳とを有する、というようなことはない。

現代の文明において、「物量」は増え、身近に溢れている。あらゆるものを手軽に手に入れることができる。「物」を量化することによって、人間は自然の主人になった。ボタン一つで命令して自然を操縦

できるようになった。けれども、そのようにして、人間は自然を失つたのである。あらゆるものを獲得したと同時に、あらゆる「物」を、牛を、羊を、あるいは山を、川を、「道」を喪失した、と言わねばならない。

二 「ヒト」としての「人」

「物」が「物量」となったことにより、一々の「物」の「物」としての性格が失われたのと並行して、人間自身も量的な単位としてのみ見られるようになり、人間が人間でなくなったということも、「物量化」としてのニヒリズムの顕著な特徴として考えられる。人間が人間としてでなく、むしろ「ヒト homo」として、動物の一種として対象化して見られるという仕方、人間の非人間化が起こる。現代は人間主義、ヒューマニズムの時代である、と一応言うことができるが、そのヒューマニズムの立場自身に、人間の非人間化の方向が本質的に含まれているのである。「物量」の充溢によって「物」が失われ、同時に、人間の種々の自由、解放の追求の進展拡大によって、「人」が失われた時代、それが現代である。

人間を「ヒト」として、動物の一種として見る見方は、十九世紀のダーウィンの進化論の登場以来、特に顕著に人間観を規定し始めた。一体、進化論的に把えるとき、人間が生物のうちの哺乳類、その中でも類人猿の中から発達して出て来た一種であることは、今日化石学的にも形態学的にも証明されていることである。類人猿はもとより、ネズミやブタのような動物の身体の諸器官と人体の諸器官との間にも構

も実際に不可能ではなくなっている。そして、そういう風に技術的に「生産」された牛は、専らいわばミルク製造機として飼育されるのであり、その期間が終れば、屠殺場に送られて、食肉や皮革として利用されるのである。中には、子牛を「製造」することを専業とする牛もあれば、初めから食肉を得ることを目的として育てられる種類の牛もある。こういう風に見ると、現代の牧場は、まさにミルクや食肉や皮革の製造工場の様相を呈しており、そこではいかに効率よく産ませ、育て、屠殺するかが畜産企業の最重要課題になるといっても過言ではない。したがって、現代においては、曾つてそうであったような、家畜として、文字通り家族の一員のようにして飼われていたような牛の在り方は事実上存在しなくなっているのである。もはや牛が牛として出会われなくなった。牛は製乳機もしくは食肉や皮革の原料でしかない。

今、我々が牛について見たことは、他の家畜についてはもとより、海中の魚貝類や田畑の穀類・野菜類等についても妥当することである。海も田畑も、今日の世界においては、食品の製造工場の性格を持って来ている。そして、それらの工場で「製造」された食品は都市のスーパーマーケットに集められて、市民の生活のエネルギー源となる。あらゆる「物」が身近に溢れて余る程有って、手軽に手に入る。しかしそのことによって、却って我々は一々の「物」そのものの、「物」の存在のリアリティーにリアルに触れることができなくなったのである。スーパーマーケットに並ぶ計量され、小分けされてビニールのパックに詰められた肉や野菜は、我々に現実生きた家畜や田畑に育つ植物

との関わり——おそらくこのことが有って初めて日々朝昼夕の我々の「食べる」という行為も大地に深く根ざした根源的なものになり得るというべき——への道を完全に断ち切ってしまった、と言わねばならない。

同様の「物量化」の現象の例として、我々是我々の環境世界の「物」、自然の山や川についても見る事ができるであろう。

山や川も二十世紀の後半になってからの急激な開発によって、根本的な変貌を遂げてきている。

昔は山は人里から離れた場所に聳えていて、人々の容易に近づき得ぬものであった。そこには人跡未踏の森林が有り、多くの野獣が棲息していた。日本では、その超越的な性格の故に、しばしば山は神々の住む所となり、場合によっては、山そのものが神体にされて祭られたりした。山間の谷を下る急流は所々に滝や淵をこしらえて特異な景觀をなし、人々は滝の水に打たれて身心を浄め、早瀬に架けた水車で穀物を搗いた。仏教徒達はよくそうした深山幽谷に修行の道場を建てた。そうした道場を修行のために訪れるには、人々は谷川に沿って付けられた一筋の狭い道を登り、更に尾根道を辿って、いくつかの峰を越えて行かなければならない。彼等にとって滝の下でしばし疲れた足を休めたり、峠で振り返ってはるかに来た道の方を眺めたりしながら、一步一步山上の道場に近づいて行くのが既に修行を意味していた。

今日、山や谷川は、もはやそのような昔の面影をとどめない程に変貌してしまっている。山上の道場は実質的に観光寺院になった。山頂付近には展望台やホテルやレストランが所狭しと立ち並び、遊園地や

ワグナーの巨大な楽劇も、ボタン一つ押せば、彼の自慢の装置から聞えてくる。しかし、音楽が、ここでは、言わば円盤に刻まれた量的時間になっている。あるいは、それはレコードの数量である。彼はレコードを買っても全部終りまでかけて聴くことは滅多にない。買っても一度も聴かないまま棚に並べて置かれているものも多い。彼の忙しい生活の中では、実際に音楽のために得られる時間は非常に限られているのである。それでも彼にとっては、彼のバッハやモーツァルトのための「量」が、レコードの「数量」が必要である。彼はそれらの過去の偉大な音楽を数量化して所有している。

もう一つ例を挙げれば、今日の学校教育における教育内容の評価である。それは全て数値で表わされる。数量的に把握できないもの、対象化できないもの、すなわち深い人格的な内容は教育の外に置かれてしまう。そして更に、そういう数量的に把握できないものも、数量化されて考えられ、提示されるようになる。例えば、今日心理学や社会学が行っているような、アンケートやカウンセリングにより集められ、分類され、計算されて得られるデータや、それから読み取られる事実はそのような性質のものである。単に外の自然の事物のみならず、つまり、デカルト的に言えば、いわゆる「延長 *extensio*」の世界のみならず、生命とか、「心」とか、社会の動態とか、そういうものも「量」として客観化され、対象化されて把握されようとしている。少なくともそのように把握されるものとしてそういうものが見られている。そこに、現代の人間の在り方の一つの大きな特徴が有る、と言い得る。それ故、現代では、あらゆるものが量として、「物量」として見ら

れるのである。「物量」が現代の「世界像」、統一的世界の姿である。前章で少し触れて論じた、現代における教育や環境や芸術や粉会の問題性も、その源を探ると、どうしてもこの点にまで遡らざるを得ない。「物」が数量化され、数量的に規定されることにより計算されるようになるということは、そのものがそれが「物」として独立自存して有るという元々の在り方においてではなく、むしろ、個々のものの唯一無二の性格を捨象して、すなわち均質的な単位の集積として扱えられることを意味している。その場合には、その「物」は、もはやその「物」ではなくるのである。つまり、それは、単に種々の単位の複合物でしかなくなる。そして、「物」の組成とその諸性質が分析され、それらの諸物質の量が測定されることにより、そのものの利用価値と価格とが決定される。「物」は製作のための「材料」に、そして「商品」になる。我々の生存を何らかの仕方では促進させてくれるような商品の原料となり得るものを有するかどうか、有するとすれば、どれ程か、がその「物」の存在の意味になる。

こういうことは、今日、我々をとりまくあらゆる事物について言い得る。人工的に製作されて有るものは勿論のこと、自然的に有るものも皆、主観の対象とされ、加工のための原料にされ、部分品や商品として存在することになるのである。

例えば、家畜の牛について考えてみよう。今日、牛は人工授精によって迅速且つ大量に作ることが可能になっている。最近の新技术によつては、極めて精巧なカッターを用いて受精卵を四等分し、それを出産専用の四頭の牛の子宮に分けて入れて産ませる、というようなこと

失われた時代である。人間の生活のあらゆる局面に「分裂」が深刻化して現われて来ている。だが、人間の生命は元来、「多」の方向と「一」の方向との矛盾的統一に成り立つのであるから、近代の人間にも、統一の方向は見られる。科学技術による物量文明や集団主義的社会の理想が近代の「一」の方向をなす。しかし、それは、「多」の側から、「多」によって立てられた抽象的「一」であり、真に「多」の根底をなす「一」ではない。それは「多」を外から統一して否定する「一」である。我々はこのような、「多」の方から立てられた「一」による「多」の否定の事態に、現代のニヒリズムの本質を見る。現代は人間の存在の根源的「一」が見失われて、「分裂」が深刻化した時代である。「教養」や「幸福」を誇りとする近代の知識人を、彼等がもはや自らを越えて存在を実現するための理想や目標を立てることができなくなり、深さと高さを失った、と弾劾したニーチェの視点も同じである。自らの存在を越えて自己実現していくための理想や目標は、自らの存在の根柢の「一」でなければならぬ。

人間自らの存在の根柢である「一」の喪失と、「多」の方からの「一」の企役とは、実は本質的に一つの事柄をなす、と言える。どちらも人間の存在においてその「一」の契機とその「多」の契機とが不可分に結びついており、矛盾的統一をなすという根本的事実に基づいて、しかも、主観がその根本的事実そのものから遊離して現実を構成し統一にもたらそうとすることによって起こる事態である。

この章では、我々は、現代のニヒリズムを、(一)主観が企投した「一」すなわち「世界像」により、世界と人間の根源的な在り方が失われて

きていること、いわゆる疎外が深刻化していること、そしてそうした場合に、(二)世界と人間の中核をなすべき根源的な「一」、すなわち具体的には、人間の存在がそこからして成り立つというべき「心の在処」が不分明になったこと、この二点に着目して根本的に考えてみよう。

第一節 全てのものの「物量化」としての

ニヒリズム

一 「物量」としての「物」

現代の科学技術的な世界の見方の顕著な特徴は、あらゆるものが計測される量の相の下に見られることに存する。現代において、「物」は全て「物量」として現われる。「どの位の大きさ」、「いかなるエネルギー量」、「どれ程の数」、「いくらの価格」等々……。

例えば、我々の住んでいる町の裏山の花崗岩の土砂を宅地造成の埋め立て工事に使った場合を考えてみよう。我々の関心事は、その山から大凡何千トンもの土砂が得られるか、この山から近くの新興住宅地までどれだけの距離が有るか、山を崩したあとに植林するとすれば、苗木は何本位必要であるか、山の反対側の斜面に市民の憩いの公園を造るためにはどの位の費用がかかるか、工事期間は何年か等々である。別の例を示せば、私の友人に、レコードを何千枚も収集している人がいる。彼の部屋に行くと、バツハやモーツァルトのほとんど全作品のレコードを聴くことができる。シュューベルトのリートやソナタも、

ければならない点であろう。人間の存在がその営為と共に全体的に問題化したということは、人間の存在を単に人間の存在としてだけで考えることができなくなったということを意味している。そういう一つの限界が、今、人間の存在に現われて来た、と言うことができる。

先に引用した文章で、

「大地はその時小さくなってしまっている。そして、その上に、全てのものを小さくする末人が跳びはねている」

とニーチェが書いている箇所は、宇宙時代の地球とその上に蠢く人間達の姿を予見している、とも読めるであろう。彼はまるで、現代の、何万キロも離れた大空を飛ぶロケットから真青な地球を振り返って見る宇宙飛行士のようなのである。

けれども、宇宙時代に来て、人々にとって地球がそのように小さくなったときに問題になるのは、地球の資源の有限性や環境秩序の破壊や世界戦争の危険のみではない。全てのものが平均化され、相対化される空間において、存在するあらゆるものがその土台を失うこと、それらのものがそこからそこへと有る大地と大空、深さと高さを見出せなくなることこそ一層重大なことだ、とも言わねばならない。ニーチェが「蚤のように根絶し難い」と言う「末人」とは、そういう存在の深さと高さを喪失した人間、生の根源的なもの、「混沌」を自ら遮蔽し、それに対して知的に堡壘を築く現代の知識人に他ならない。

註

(1) ニーチェ『ツァラトゥストラはかく語りき』、『ツァラトゥストラの序言』、五。

第二章 現代のニヒリズム

我々は、現代という時代を、人間の存在が世界の全体と共に一つの大きな問いになっている時代と考えた。自己自身にとって謎であるという人間の固有な本質的性格が、現代においてそれとして全体的に顕現して来た、と言った。そして、その、現代における人間の問題の本質を、我々は、人間の存在の「分裂 Zersplitterung」に求めて、その實際を、現実の人間の種々の営為の中に確認した。近代が人間と世界の無限な分化、「分裂」の時代であるとすれば、現代、すなわち、二十世紀から二十一世紀への移行期は、そうした近代の「分裂」の事態が人間と世界自体に対し問いとなった時代として見ることができる。

元来、存在するもの、生きたものは、無限な分化と無限な集中、無限な多様化と無限な統一の矛盾的統一として成り立つ、と言わなければならぬ。多様に分れて行く方向と、集中し、統一する方向とが矛盾しながら同時に一つに成立するところに、生命が有る。多様化と統一とどちらの契機を欠いても、生命としては、不完全に、抽象的ならざるを得ない。無限な多様化に即し、多様化を貫いて、いつでも「一」が存在しなければならぬし、「一」は単に「一」に止まるのではなく、「一」としてどこまでも分化して、「多」のうちに具体的に自らを表現するのだからなければならない。「一」は「多」の根柢であり、「多」は「一」の現実態である。

そういう風に見るならば、近代という時代は存在の一方の契機である「多」の方向が極度に発展して、他方の契機である「一」の方向が

牧人は存在しない、存在するのは一つの畜群である。全ての者が平等を欲する、全ての者が平等である。そのように感ずることのできない者は、志望して気狂い病院に入るより他ない」と。

全ての者が小さくなり、小さな快樂、小さな慰安、小さな善、そして、それらの平等分配を約束する権力と制度とを希求する現代の大衆社会をニーチェは既に百年前に正確に予見している。彼の深い夜の世界の漂泊の経験が、昼の世界、存在だけの世界の虚構性を洞見する目を開いたのである。

『我々は幸福を発明した』——末人達はそう言って、まばたきする。

現代のいわゆる知識人、「教養人」は彼等の発明した幸福の是認の上に立つのであって、彼等の立っている脚下の悲惨に目を向けることはしない。なぜなら、彼等の発明した幸福とは、まさしく自らの存在の底の悲惨、キエルケゴールの言葉を使えば、「死に至る病い」としての絶望から絶えず目を背ける方向にこそ成り立つものであるから。

科学技術文明の進展やそれを中軸とした「教養」が人間性の本質に根ざしていることは言うまでもない。しかし、人類は元来そこに自らの目標を見出すことはできない。そこに我々の存在の根柢を、我々の最高の希望を置くことはできない。なぜなら、生には死が、健康には病気が、自由には必然が、昼には夜が、存在には無が、時には永遠が初めから本有的に属しており、その厳然たる事実の上にはっきり立たない生の営みは、全て真実でないからである。

存在の一方向のみを追求する生の虚構性——我々はここに現代のニヒリズムの本質的なものを認めることができる。現代世界の外的物質的繁栄の表皮の下に広がる空洞こそ怖るべきである。

ニーチェのニヒリズム克服の論理ははっきりしている。それは先ず、現実の生の虚構性を、文明の底の空洞を認めることから始まるのである。ほとんどの人がそれから目を背ける生の営みの虚偽とを率直に受けとめ、耐え忍ぶことを通して、その底から本来の自己自身、大いなる意志が目覚めて来る。

ツァラトゥストラは語る。

「人間は今も己れの中に混沌カオスを持っていて、舞踏する星を産み出すことができるのでなければならぬ。私はあなた方に言う。あなた方は今もあなた方の中に混沌を持っている、と。

憂うべし、やがて人間がもはやいかなる星をも産み出さなくなる時が来る。憂うべし、もはや自己自身を軽蔑することができない最も軽蔑すべき人間の時が来る」と。

我々の外に広がる現代の混沌の状況は、実は、我々が先ず我々自身の中に有する混沌を率直に認めることをしないことからの必然的帰結である。自身の中に混沌を認めるとは、我々が自己の無限な否定において自己を見出すこと、つまり、ニーチェのいわゆる深淵への没落において自己超越し行くことを意味する。混沌、このディオニュソスのなもののこそ創造の根源、「舞踏する星」の産出の力源に他ならない。

ニーチェは人間を「超越されるべきもの」と見ていたが、それは、人間の存在が全体的に問いとなった現代においてこそ根本的に考えな

Mensch」なのであらう。

だが、このように、近代の人間の「教養」に虚しさを見るツァラトゥストラ自身は、近代の人間においては隠されている一層深い、直接的な生のリアリティーに立っている、と言わねばならない。近代人の誇りとする知識、彼等の足場である「教養」を見下すツァラトゥストラ自身は、もはや近代人の立脚地には立っていない。そこからツァラトゥストラの、文明に対する批判、より直接的な、より根源的な生へと人々を鼓舞する言説が生れるのである。

「今こそ人間が自らの目標を立てるべき時である。人間が自らの最高の希望の萌芽を植えつけるべき時である。

まだ今なら、人間の土壌はその植えつけをなし得る程に豊かである。しかし、この土壌はやがて痩せ、軟弱になるであらう。そして、そこからはもう一本の大樹も生い出ることはできなくなるであらう。

憂うべし、やがて、人間がもはや彼の憧憬の矢を人間を越えて射放つことがなく、己れの弓の弦を鳴り響かせることを忘れてしまう時が来る」と。

ツァラトゥストラの言う「末人」とは、文明が発展し、民衆の啓蒙が進んで、社会が最も成年に達したと見られる時代の指標となる人間の姿であり、いわば、ホモ・サピエンスとしての人間が、知識による「教養」、すなわち自己形成の最終段階に到達したところで現われて来る在り方である。

ニーチェの「末人」「教養俗物 Bildungsbilister」として扱えられた近代人に対する診断は極めて正確である。技術の発展と知識や

権利の安易な平等分配によって強められた人間の生の深みの喪失とその崩壊の現象は、実に、今日、地球上のあらゆる個人の、またあらゆる共同体の運命となっている、と言える。

同じ節で、ツァラトゥストラは次のように語っている。

「見よ。私はあなた方にそういう末人を示そう。

『愛とは何か。創造とは何か。星とは何か』——そう末人はたずねて、まばたきする。

大地はそのとき小さくなってしまっている。そして、その上に、全てのものを小さくする末人が跳びはねている。その種族は蛋のように根絶し難い。末人は最も長生きする。

『我々は幸福を発明した』——末人達はそう言って、まばたきする。彼等は生きるのに苛酷な土地を去った。人は温みが必要とするからである。人は更に隣人を愛し、互いに身をこすり合わせる。人は温みが必要とするからである。

病気になることと不信を持つこととは彼等にとって罪である。彼等は注意深く歩く。石や人に踏く者は愚者である。

彼等は時折、少量の毒を服用する。それは快い夢を見させてくれるからである。そして最後には多量の毒をもらって快い死に到る。

人は尚働く。なぜかといえば、労働は一つの慰安だから。しかし、人は、この慰安が身体を損することのないように気を付ける。

人はもはや貧しくなることも富むこともない。どちらも煩わし過ぎるのだ。誰が尚統治しようとするであろうか。誰が服従しようとするであろうか。どちらも煩わし過ぎるのだ。

人間の現在

—— 哲学的省察 —— (三)

石井 誠 士

第六節 ニヒリズムの時代

—— ニーチェの「末人」の思想 ——

現代の人間において、そのあらゆる営為が問題化していることは、現代の世界においては、人間が何をするにせよ、自らのしていることのほんとうの意味とか目的とかが自己自身にはっきりしていないという、結局なぜ、何をめざしてそれを行っているか、とつきつめて問われれば答えられなくなっていることを意味している。自らの学問や行為や創造の最後の目標が解らないのである。人間の存在の「分裂」ということは、そこにおいて存在が究極的に統一されるべき存在の根拠、統一点が定かでなくなっている、ということである。

そういう事態は、既に百年前に、ニーチェが鋭くはつきりと把えていた。ニーチェのニヒリズムの把握の中には、科学が発達し、人々の教養が高まるに従って、人間がその生の根拠を見失い、深い内面性を欠いた、目前の安寧のみをあてにした皮相な生活を追求することになることへの透徹した洞察と予見とが含まれている。この点でも、彼は

キェルケゴールやドストエーフスキーと思考方向を同じくするのである。科学や技術の発達と大衆の教養の進展、更に物質的豊かさ等は決して人間にその本来の根源的生を約束するものでないということ、根源的生はそうしたいわゆる「進歩」とは違った方向に、「進歩」に対しては、むしろ「退歩」とでもいうべき在り方にこそ見出されねばならないということを彼等は、「進歩」の世紀、十九世紀の真只中においてはっきりと洞察していた。

一つの良い例を『ツァラトゥストラはかく語りき』の第一部序説の一節に求めてみよう。ニーチェは、そこで、群集を前にしたツァラトゥストラに次のように語らしめている。⁽¹⁾

「彼等は彼等が誇りとするものを持っている。だが、彼等をして誇り高ぶらせているものを彼等は一体何と呼んでいるのであろうか。彼等はまさしくそれを教養と呼んでいる。これこそ羊飼いに對して彼等を優越させるものである。

それ故、彼等は自らについて『輕蔑』という言葉が使われるのを好まない。そこで、私は彼等の誇りに對して語りかけようと思う。

そこで、私は彼等に、最も輕蔑すべき者について話すことにしよう。それはつまり、末人というものである」と。

中世の人間の誇りは神であり、信仰であった。これに對して、近代の人間は「教養」を誇る。だが、ツァラトゥストラからするならば、己れの「教養」の故に自信を持ち、自己自身を輕蔑することができない人間、もはや己れを越えてより高きものを實現せんとする意欲を持たなくなった人間こそ最も輕蔑すべき人間、「末人 der letzte